



北川 禎三 (教授)

1963年大阪大学工学部卒 1966年大阪大学大学院理学研究科博士課程中退、理学博士 大阪大学蛋白質研究所助手、文部省長期在外研究員(ミネソタ大学化学科) 学術振興会フランス派遣研究員、大阪大学医学部助教を経て1983年より分子研教授 現在は統合バイオサイエンスセンター教授 1988年日本化学会学術賞受賞 1996年日本分光学会学術賞受賞 2002年日本化学会賞受賞
TEL: 0564-55-7340 FAX: 0564-55-4639
電子メール: teizo@ims.ac.jp

当研究グループは時間分解ラマン分光法を主たる実験手法としていて、分子の動的構造と機能との関係を調べる研究を進めている。生体分子及びその関連化合物を研究対象としている。研究内容は次のように分類される。

タンパク質の速いダイナミクス

タンパク質によるプロトン能動輸送、電子伝達、及びそれらのカップリング機構

タンパク質高次構造変化の動的過程と情報伝達、アミロイド化の構造化学

金属タンパク質活性部位の構造 - 機能相関

ではタンパク質の超高速ダイナミクスをピコ秒の時間分解共鳴ラマン分光で調べるもので、振動緩和や構造緩和を明らかにせんとする。は生体エネルギー産出の分子科学の最前線課題で、チトクロム酸化酵素によるプロトン能動輸送の際のプロトン/電子カップリング機構の解明を手がけている。は200~240 nmの紫外レーザー光を光源

とする紫外共鳴ラマン散乱を用いて芳香族アミノ酸を選択的に観測し、タンパク質分子の3次構造や4次構造を議論するものである。これをナノ秒で時間分解測定して、蛋白質の構造変化を追跡する方向にも展開している。タンパク質の分子内情報伝達、タンパク質のフォルディング機構など、色々な題材に挑戦しつつある。また、偏光顕微赤外分光法でタンパク質のアミロイド化の構造化学の研究を新たに始めた。は広くヘム鉄や銅、ニッケルなど金属タンパク質や、そのモデルとなる金属錯体の共鳴ラマン分光で、金属配位構造を明らかにせんとするものである。この他、新しい赤外分光システムの製作、ナノ秒温度ジャンプ装置の製作など、“振動分光をシャープに生かす分子科学”という大きい目標で研究を展開している。下の図は、この研究グループの成果が教科書にも掲載されている部分で、「分子細胞生物学」第4版 H. Lodishら著、野田春彦ら訳(東京化学同人)、我々が誇りにしている。

参考文献

- 1) N. Haruta and T. Kitagawa, "Time-Resolved UV Resonance Raman Investigation of Protein Folding Using a Rapid Mixer: Characterization of Kinetic Folding Intermediates of Apomyoglobin," *Biochemistry* **41**, 6595-6604 (2002).
- 2) A. Sato, Y. Sasakura, S. Sugiyama, I. Sagami, T. Shimizu, Y. Mizutani and T. Kitagawa, "Stationary and Time-Resolved Resonance Raman Spectra of His77 and Met95 Mutants of the Isolated Heme Domain of a Direct Oxygen Sensor from *E. coli*," *J. Biol. Chem.* **277**, 32650-32658 (2002).

